2026 年 10 月 4 日（日）主日朝礼拝説教

『弟子の条件』　井上隆晶牧師　Ⅱコリント 2：14～17、ルカ 14：25～35

❶【二つのたとえ話の意味】

イエス様は自分についてきた大勢の群衆に向かって、両親、妻、子供、兄弟姉妹、自分の命でさえも捨てる覚悟がなければ弟子にはなれないし、十字架を背負ってついてくるのでなければ弟子にはなれないと言われました。**家族や自分を最優先にするのではなく、イエス様を最優先にできなければ弟子にはなれないと言われたのです。十字架を背負うとは自分を殺すという意味です。**よく教会生活がしんどいと文句をいう人がいます。それは教会とか信仰生活というものを誤解しているか、聖書を読んでいない、イエス様の言葉をちゃんと聞いていないからです。信徒になるということは十字架を負う覚悟をしなければならないのです。

そして二つの譬えを話されました。一つ目の譬えは、塔を建てようとするとき、造り上げるのに十分な費用があるかどうか、誰でも腰を据えて計算するだろうというのです。そうでないと土台を築いただけで完成せず、皆に笑われるだろうというのです。またもう一つの譬えは、戦いをしようとするときに、二万の兵を率いる敵に対して、一万の兵で迎え撃つことが出来るか、どんな王でも腰を据えて計算するだろうというのです。もしできないと分かれば、敵がまだ遠くにいるうちに使節を送って和睦をするというのです。この二つの譬えは何を教えようとしているのでしょう。私はずっとこの意味が分かりませんでしたが、最近になって分かりました。これは「**本当の自分の姿を知れ**」という意味です。そうでなければ信仰生活を途中でやめてしまい、物笑いになるでしょう。この後、主は「**同じように、自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたはだれ一人としてわたしの弟子ではありえない。**」（ルカ 14：33）と言われました。自分の持ち物を一切捨てるというのは、自分が頼りとしているものすべてを手離さない限り、イエス様の弟子にはなれないという意味です。

❷【自分を知ることが信仰の初め】

金持ちの若い議員がイエス様に「**何をすれば永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか**」と尋ねた時、主は「**あなたに欠けているものがまだ一つある。**」（ルカ 18：22）と言われました。その一つのこととは「自分を知る」ということなのです。つまり自分が人を愛せない者、戒めを守れない者、罪深い者、正しくない者、魂の重病人であることを知らなければならないのです。**まず自分を知ることが救いの第一歩です。**それゆえ神はまず十戒を人間にお与えになりました。十戒は私たちが人間でなくなっていることを教えるためのチエックリストです。しかし金持ちの議員もユダヤ人もそれを自分の正しさを証明するための道具として間違って用いたのです。

●心の病の勉強会で学んだことは「**病感はあっても病識がない人が多い**」ということです。自分が病気であることを人はなかなか認めません。アルコール依存症の人は、「自分はただ酒が好きなだけであって、依存症ではない」と言います。統合失調症の人は、「幻聴、幻視は本当だ」と言って、映像も言葉も自分の脳から出て来ることを認めません。ただの酒好きか、依存症かの判断基準は「周りの人が迷惑しているかどうか」なのです。**周りの人が困っていたらそれは病気であり、治療をしなければならないのです。だから人の中に入って行かなければ、自分が分からないのです。人が自分を映す鏡になるからです。自分の周りの人が困っていたら、自分が困っていなくても、その人は病気なのです。**

いくらその人を癒そうとしても、その本人が病気であることを認め、変わりたい、治りたいと思わなければ治療はできません。**自分が病気であり、自分は変わらなければならない、変わる必要があると認めた人だけが、治療に来るのです。つまり教会に来るのです。そういう人がキリストの弟子なのです。**私たちは肉体が病むとすぐに病院に行くくせに、自分の魂が病んでいても、腐りかけていてもちっとも教会に治療に行きません。罪を指摘されても逆に噛みついてきます。自分の罪が見えていないからです。これが最大の蛇の毒悪の症状です。悪魔は私たちの目を見えなくさせたのです。

❸【自分自身の内に塩であるキリストを持て】

続けてイエス様は「**塩は良いものだ。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって味がつけられようか。畑にも肥料にも役立たず、外に投げ捨てられるだけだ。**」（ルカ 14：34）と言われました。この場合の塩とはキリストのことです。キリスト教徒からキリストがいなくなれば何の役にも立たないということを言っているのです。

先日 9 月 30 日（水）に頼まれて千里聖愛教会の信徒さんの葬儀をしました。今、千里聖愛教会には牧師がいないからです。その信徒さんは私も知っている方で、今から 38 年前に私が千里聖愛教会に派遣神学生として行っている時にお世話になった方でした。不思議なご縁だと思います。最後の収骨までお付き合いさせていただきました。窯から出てこられたその方のご遺骨はもろく、ほとんど崩れていました。骨壺にもすべてのご遺骨を入れることはできません。ほんの一部だけです。ああ、人間の最後はこのようになるのだなあ、と思いました。**そしてその時はっきりと分かったのです。私たちのこの世の肉体というのは、魂を入れる入れ物だと。魂が去れば、この入れ物は土に返るのです。**

●先日、大相撲秋場所が終わりました。最後の日（千秋楽）に、「**神送りの儀式**」と呼ぶ、土俵から神様の霊に帰ってもらう儀式というのがあるのを知りました。その後、シャベルを持ってきて、土俵の真ん中の土を掘り始めると、その中からスルメ、栗、米、塩、昆布、木の実の六種類の物が出て来ました。それは「**鎮め**

物」と呼ばれ、無事に大相撲の行事が終わるように、初めに土の中に埋められた神様への供え物、神の霊を鎮めるための供え物なのです。神の霊が去った後の土俵は、つるはしで壊され、元の土に戻されるのです。神の霊が去れば堅固なる土俵もただの土に返るのです。

日本人というのは、霊が去れば人は土に返るということを体験から知っていたのではないかと思うのです。**私たちも葬儀に出て、ご遺体を拝見する度に、何か抜け殻のように見えるのも、直感で分かっていたのだと思います。いくら科学が進歩し、医学が発展しても、科学では所詮この肉体という魂の入れ物をいじくって修理するだけのことであって、人間というものを知ることも、生まれて来る意味を解明することも出来ないのです。**

この世には目的はありません。なぜならこの世の物を来世には何も持って行けないからです。蝉は土の中で 10 年ほど暮らしますが、それは土の中で生きることを目的としているのではなく、土から出て殻を破り、新しい体を得て空を自由に飛ぶために生まれて来るのです。それと同じように、**人間もこの世で生きることが目的なのではなく、この世を出て、古い入れ物である肉体という殻を破り、もっと優れた天的な体を得て、自由に天の国で生きるために生まれて来るのです。人は復活するために生まれるのです。**この世にどっぷりと浸かってしまうと、つまりこの世の物でいっぱいだと神の霊は人の中に入れません。この世の肉体という入れ物には入る量が決まっているからです。だから断食し、節制し、この世の物を捨てて身軽になると、神のものが入って来るのでその人の魂は澄んできて、どんどん神のことが見えるようになるのです。魂がこの世を去る用意が出来ると、だんだんこの世のものが入らなくなり、つまり食事を取らなくなり、肉体はどんどん小さくなってゆき、土に帰るのです。

キリスト教徒というのは、この世の肉体という器の中に、人間の魂と神の霊（聖霊）の二つが住む人のことです。昔の教父たちは「**神は、人間の中に永遠に住む練習をされる**」と言っています。この神の霊を持っている者と、持っていない者では運命は変わってしまうのです。私たちはこの土の器の中に神を入れなければなりません。**キリストの弟子とは、この世の物を頼りにするのではなく、キリストを頼りにする者です。最後は自分も頼りにはなりません。計算を誤ってはなりません。私たち人間やこの世には人を救う力はないのです。「人間に頼るのをやめよ。鼻で息をしているだけの者に。」**（イザヤ 2：22）

神キリストの霊が人の中に住めば、その人の体は神の体となりこの世から用いられるでしょう。しかしキリストが去れば、その人は何の役にも立たず、ただの土に帰るでしょう。しかしキリストはあなたの中に住むために来られ、それを切望されています。あなたをただの土に帰さないためにです。あなたを人にし、神の子にし、永遠に生きる者にするためです。どうか皆さんがキリストを頼りとしてしっかりとキリストの霊が住む、住まいとなって欲しいと願います。